

# 眞生

第二十卷 第二號

□ 靜に思へば二月十五日は釋尊入滅の當日に當る。正に今日から云へば二千數百年の昔である。それにもかゝはらず、多くの人は此の日を卜して釋尊入滅を記念する。擾へば實に不可思議の感である。

□ 人と云ふ人の中に、此の世に生れて此の世に死すると云ふことは必ずしも珍らしい事ではない。乍然それにもかゝはらず、印度に生れた釋尊の死がかくまでも人の心を動かすのは何故であらう。

□ 私はそこに釋尊の偉大さが多くの人の心を射るものがあるからと言はざるを得ない。恐くそこには常人の企及しがたい、眞實の光が人の心を引くからであらう。

□ 然らばその光とは何であらうか、それは云ふまでもなく釋尊の心境、解脱の當體、涅槃寂靜の示現、即ちそれである。然らば釋尊の死は眞の死にあらずして、永生の光、涅槃の妙境を示す。

□ とは云へ當時釋尊の入滅はいかばかり多くの人達を驚かした事だらう。特に多くの弟子達に於て、釋尊の入滅は全く絶望の極みであつた。あらゆる鳥や獸まで釋尊涅槃の夕べに待つて、その入滅を悲しむの圖はその後の人の想像によるとは云へ、全く當時の人情をうがてるものと云ふ可きである。

□ 乍然凡そ世に死と云ふ死は多い中に、釋尊の死ほど世に偉大なるものはない。所謂永劫の入滅が眞の入滅にあらずして、却つて、人類の永生を示現す。生者必滅の道理を説き乍ら、そこに却つて永生不死の涅槃を現はす、實に釋尊の教へにあらずして、誰かよく此の眞理を示しうるものぞ。

□ されど友よ、私はすべての人にかう云ひたい。お互も亦此の世に生れて来た限り、一度は必ず死なねばならぬ。乍然その吾人は果して、永劫の死とならずして永劫の不死となりうるか」と。

□ ああ人誰か此の世に生を得て死なからん。乍然それを知つて、眞にそれを脱すること、永生の第一義である。(念)

目次

- 底に動く流れ 越子
- 夜は明けた 越子
- 宗教の生活と 土屋觀道
- 民族自決 土屋觀道
- 宗教と人生(四) 土屋觀道述  
安田恢順記
- 第三紀元への 中野越子
- 世界的動向 中野越子
- 新年の歌
- 傳道旅行お伴の記片囃憲三
- 支部通信並ニ吾朋便り

底に動く流れ

同じように目を二つ、耳を二つ、鼻を一つ、口一つを持つてゐる人間同志の顔でさへ、よく見較べると必ず違つてゐる點があります。沉んや思想、信仰に至つては同じようでも亦必ず違つてゐる一點がある譯です。

それなのに此頃、見も知らぬ衆議院選舉立候補者の政談演説に應接演説をして呉れと頼まれて平に御辭りしました。自分だけの所信を叙べるといふことなら、そりや出来ぬ事もないでせう。而し自分とどれ程意見が一致してゐるかどうかわからぬ人の提燈持ちは出来ませぬ。昔は主人が召使に命ずるのでも、君主が家來に命ずるのでも高壓的に何も彼もなく、上から下へ云ひ附けたものです。而し今はもうそんな事は出来ませぬ、した處で諾かれませぬ。サポータージュヤストラキ、其他革命運動が多くなつて來たのは、此の彈壓下に苦しめられた者が、團結して反抗しようとする自覺運動の一つの現はれであることと思へば、亦喜ぶべきことであります。それだけ專制的統一とか、盲目的屈從などをせしむることが出来なくなつた證據です。

どうでも斯うでも本心から自覺させ、自覺した上で一致提携してゆくといふのでなくては、本當の動きが出来ませぬ。

廻り遠いようだが、此の衷心からの理解、融合でなくては仕事の能率が本當に上らぬのです。一時の利益の爲めに兩眼を瞑つて、肚を合せたように見せかける事もあるが、少し利益が擧らぬとなれば直ちに割れて了つて、結局効果が上らぬ。矢張り根本的契合、本心的相認が第一であります。

これを見ても世はます／＼根本的に於ては道德的、宗教的に進化の階梯を取つてゐるものと私は思ふ。(越)

夜は明け

夜が明けてから「サア、起きよう——」では遅い、それは朝寝坊と云ふものである。夜の明けぬ前に起きて、夜の明けるのを待つ位でなくてはいかぬ。いやそれでも晚い、自分に起きて起きると同時に周囲を夜明けにして行く位でなくてはいかぬ。それを人から起こされても、手を引張様働きを知らぬ者である。

夜は立派に明けた。東洋からも西洋からも夜は明けた。そして太陽はグン／＼昇りつゝある、此の太陽の昇つて行くにつれて、太陽に負けぬように進みつゝある國が——國民がどれ程あるあちらにもコチラにも國民運動、新國家政策が各々行はれて、國家の建て直しをして居ります。それでも尙ほ、此の太陽——世界精神、人類進化の速度には遅れつゝあるのです。

今頃まだ寝てゐるような事では晚い、座つて考へてゐるような事でも晚い。立つて歩け、走れ、飛べ!

國內黨を争つてゐるような事では駄目だ、友達利を争つてゐるような事でも駄目だ。家利を失つてゐるような事でも駄目だ、自己亦、信を失つてゐるような事でも駄目だ、それでは唯だ混亂、衝突、呑噬、人の利を奪ふべきでなく、利は自ら産め。人の力を借りるべきでなく、力は自ら出せ。助け合ふと云ふことは、自分は骨折らず人に骨折らすことではなく、自分先づ骨折り人にも骨折りをさせることである。此意味に於て自覺したる協力、共同、同盟が最も進んだ眞生の態度であります。

「指導して貰ふ——」などと云ふ時代は過ぎて、今將に自覺を以て相引き、相教へ、相進み、共同の邪魔に對しては相戦ひ相防ぐべきの期です。信仰といふことは單なる思惟といふことではない、又單なる理想、原理といふことでもない、眞に生かし給ふ天地よりの聲を聞き、此の聲に従つて自分が使命の道に邁進することでありませぬ。使命の道を未だ嘗て一度も感じた事のない死人ならばいざ知らず。活かざる者には必ず眞に活く可き道が自悟されねばならぬ譯である。(越子)

# 宗教の生活と民族自決

土屋 觀道

□宗教と云つても、今日の宗教には色々の宗教があつて一概には云へないけれども、之を佛教の立場から云へば其の目的は各人の自由にある。そこには神の支配さへ受けられないのです。まして、人間の支配をやであります。

□かく云へば佛教徒が神佛を拜み、佛の使命にその身を献げるのは何であるかと詰問する人もあるかも知れませんがそれは普通の宗教が神の奴隷となつて働くとはその趣きが異なるのであります。

□此の事は少しく佛教の起原を尋ねて、釋尊成道の心底を探ぐれば直に明了となる事でありすが、殊に大乘佛教の究竟目的を採明すればそれは一層此の事を明にする事ができます。即ちそこには一切の衆生に佛性を認めて、各自が佛陀たるの最上生活を許すのであります。

□たゞい今日ではいかなる愚人でも將來は最上智者たることを許すのであります。そしてまた今日ではいかに悪人でもやがては最上善人たる事を認むるのであります。神と我と其の本を一にし、佛と我と別人でない事を主張するのが佛教であります。況んや貴賤老若男女貧富を問ふものではありません。

□従つてまた、此の意味から云へば人種の差別や國の大小など全く問ふところではないのであります。

二

□乍然かゝる考へは道德の進歩、社會の發展に伴つて、世界の有識者は明に之を認めるやうになりました。たゞ未だ時代が之を如實に實踐するところまでに到らぬが爲めに一見その進展を見ないやうであります。乍然時代の進歩は正にそこにまで到らねば本當とは云へぬであります。

□此の意味から云へば彼の戦後に於けるウイルソンの提唱した民族自決主義は正しく人道の一大進歩と云つてよいのです。従つて、人類の自由、民族の平和は正しく此の民族の自決を中心としてこそ眞に求めらるべきと云ふべきです。

□乍然私の疑問とするところは彼は何故に敗慘國たる獨逸にのみ民族の自決をせまつて、その提唱者たる米國自身には之を適用しなかつたかと云ふ事です。否ればかりでなく、獨逸以外の他の總ての戰勝國にも此の民族の自決を主張しなかつたと云ふ點にあります。民族自決が本當によい事ならば世界何れの民族と雖も之を以つて望む可きではないでせうか。

□尤も理窟のつけやうでは民族自決そのものは決して悪い事ではないとしても、その民族の文化の程度によつて、さう一概には實行できないものもあると云ふ人もあるかも知れません。乍然此の議論は戰敗國の民族のみにはそれがあつて、他の戰勝國にはそれがないと云ふ理由にはなりません。

□之は主として、戰勝國の我まゝであり、横暴であり、勝手であつて、戰敗國の獨逸に對しては之によつて一層その國の將來に於ける發展を押し、再び大國として起つ事のできないやうにしたのであり、他の一方では自國の領土に對しては公く民族の自決を無視した事になつて居ります。

□かうした事は今に始まつた事ではないが、之では全く自國の爲めに他の民族を全く無視したやり方であり、そこには少しの人間味もなく、亦人としての道徳心も見られないのみならずそれではあまりに我まゝすぎる國家主義と云はねばなりません。

□それが未だ野蠻時代とか未開國とか云ふ時代ならばそれも亦幾分許すべき點もありますが、それらの國々が何れも自ら文明國であり、一等國であるご許す國々に於て此の始末であると云ふ事は世界の文明もまた知れたものです。

□乍然それはそれとして、是等のやり方が眞に文明人としてのやり方でない限り、私共は此の考への誤りを訂してやるのが本當ではないでせうか。之は少くとも今日の佛教徒の一大使命と云ふべきでせう。それには已に民族自決のよい先例もある事だから、之を擴めて世界各國に及ぼさしむればよいのです。

□殊に此の事は深く獨逸と提携して各國の民族を開放すべく、世界の文明國に之を宣傳し、併せて、その民族の自決を自ら決するやう各種民族の自覺運動を起す可きです。殊に英米佛等の領土に於て其の必要を痛感するものであります。

□それには各自その國の事情も異り一時決行する事も出来ぬ場合もありませう。乍然何れの國と雖も自分の國の爲めのみから押して之を私すべきでない事はもとよりであります。従つてそれらの國々は一刻も早く此の主意に基いてその國の民族を各自決せしむべきであります。

□而も此の事は歐洲の各國を除いて、その他の民族の現状を望みますれば實に日本を除くその他の國は一として眞に獨立の國としてはないと云つてよい有様であります。此の意味から云へば世界は今このころ殆ど歐米の私に屬すると云つてよい程であります。

□否、此の分では我が國の權益さへ是等の國々が後押となつて蹂躪させやうとしてゐる次第であります。その實例は我國に於ける滿蒙の權益や上海の事件に於て明に之を示してゐるではありませんか。若しも此の際我日本が他の東洋民族のやうに弱國であつたらごうでせう。それこそ今頃は遠の昔に亡ぼされてしまつてゐるのであります。

□靜に思へば印度にしても其の國土と云ひ文明と云ひ、その昔は決して歐洲の何れの國にも劣るものではありませんでした。否、現に今日と雖も國土の豊なる民族の良種なること必ずしも他の野蠻國と同視すべきではありません。

□その他、アンナン、シヤム、ベルシヤ、西藏を始め、トルコ等の東洋民族は必ずしも發展不可能の國ではありません。たゞ多くの自利と自然の國々が之等の獨立を妨げて居るに外ならぬのであります。

□願くば我等東洋の民族は此の現實を直視して、靜に將來の發展を計るべきではないかと思ふのであります。而もその事は單なる一國からの打算でなく、深く人類の向上と平和の上より、一視同仁の心を以つて、如來の大悲を宣揚すべきだと思ひます。

□如來の大悲とは天地の心であります。萬法一如の精神であります。我人共に生きるの眞實心であります。帝國の使命も亦そこにあるのではないでせうか。そこまで行けば更に東洋も西洋もありません。東西呼應して共俱に此の舉に出づ可きであります。(一九三二、三、四)

# 宗教と人生 (四)

土屋 觀道 述  
安田 恢 順 記

## 第九 宇宙と人生

自分はどこから生れて来たのかと云ふ自己の本源をたどり、又自分は何處へ去つて逝くのかと云ふ自己の將來を考へ、而もその間に於ける人間の一生をいかに生くべきかと云ふことを本気で考へるやうになつてこそ、所謂人生の意義も一層明かになつて來ると云ふものです。而も此の事を明に知るには深く宇宙と人生との關係を考察する必要がありまゝ。言かへれば宇宙に於ける人間の位置と云つてもよいのです。

然に宇宙と申しますれば多くの人は之をたゞ物理學的や天文學的にのみ考へまして、生ける宇宙としての大自然を考へる人が甚だ少いのであります。まして、宇宙の精神とか、宇宙の大靈とか云つて、之を一大人格的に考へると云ふが如きに至つては多くの現代人には全く考へられないこととありませう。

乍然それにもかゝはらず、人生の眞意義を深く反省し

て行きますれば私共の考へとしてはどうしても此の宇宙と云ふものを一大生物、殊に宇宙精神の一大活動として此の世を見なければ私共の人生は眞の意義を發見することができぬのであります。それは何故かと申しますれば此の天地間の中に私共を發見して、その天地と我等の關係を深く尋究して行きますと、どうしても私達の生命と宇宙大自然の生命とが全々異なるものとは思へないからであります。否、それどころか私共の生命がどこから來たかと云ふことを遠く時間的に尋ねれば私共の生命は宇宙の生命から分派して來たものより外に見る道がないからであります。して見ると私共の生命は寧ろ宇宙生命より分れたものと云はれ、又私共の生命は宇宙生命と一致することによつてのみ本當の意義を爲すと思はれないからであります。

此の意味に於て、私共の自由と云ふものは天地の法則の許す範圍内であつて、而もその天地の法則に従つて、天地と共に生きると云ふことが本當の自由と云ふことに

もなるのであります。何れ此の事は後日更に詳細に述べるつもりであります。此の私共の生命が單なる有限のものにあらずして、此の宇宙の無限なる生命に連がるものであることを知るに到つて始めて私共も亦永遠の生命たることを知るに到るのであります。而も此の宇宙の生命は外に向つてはあらゆる新羅萬象となり時空に亘つて一大生命の流れを爲し、併せて限りなき進化發展の活動止まざるものであります。而も内的には宇宙大靈の輝きとして、如來の大悲として働いてゐるのであります。

之を佛教では眞如と云ひ、法性と云ひ、佛性と云ひ、又宗教的には本佛と云ひ、如來と申して居ります。儒教では天と云ひ、クリスト教では神と申して居ります。尤も詳細に之を論ずれば儒教と佛教とクリスト教とはそこに可なりの相違點もありまして一概にすべてが同じだとは云へない點もあります。乍然それにもかゝわらず、翻つて三者の中心生命を眞劍に調べて、その教への歸着する所を靜に望むれば凡そ天地に漲る宇宙の大生命に自らの生命を託せないものはありません。

## 第十 價値の人生

就中、私共の生活に於て、知惜意の働きは天地の大道に一致せざれば本心の満足が得られないやうに出來て居

ります。之を如實に極むれば天地の眞理は宇宙の大生命の外に何物もなく、天地の生命と私共の生命との一致點は宇宙の眞善美と私共の知惜意の融合にあります。哲學と科學と、道德と藝術との境はそこに自ら眞善美の境地を各展開して居りますが、之等の統一としての魂の世界は所謂佛の世界として、聖なる世界を現はしてゐるのであります。

されば人と云ふ人の生活の中に於て、私共の眞に喜びとし、樂しみとして、人間としての生きがひは一體どこにありませうか、永遠の生命に於て、限りなき向上の世界をたどる、それこそ人類生活の最大幸福と云ふ可きでありませう。

私は此の意味に於て、常に釋迦、孔子、クリストの生活を最も高き生活として、崇拜して止まない一人であります。孔子がいかに天の使命に生きやうとせられたか、釋尊がいかに佛の道に忠實であられたか、そしてまた、クリストがいかにその神の道に眞劍であられたかはよく人の知るところであります。

然に多くの人は果して一生の間いかなる生活を此の上に實現してゐるでございませう。私利と私慾とに一生を没頭し、弱肉強食生存競争に日夜鬭争をのみつゞけやうとしてゐるのではあるまいか。國と國との間にも、個人

と個人との間にも心からなる安らぎを得るものがないと云ふことは未だ人類が宇宙の大靈に目醒めないところから来るのであります。

此の意味に於て私共は先づ天下に呼號して、如來の在しますことを人類に知らしめ人生の意義として如來の大

## 第三紀元への世界的動向

中野 尅子

世界は今、將に、どの國も第二時代より第三時代へ入らんとして、一大展開をしつゝあるように思ひます。

第一に目に附くのはロシアです。

君主專制の極度に發達してゐた國だけに、ヒツクリ返へるとなると又一番早く、今度は、思切つて反動的なソビエトロシアとなつて了りました。そして國家主義より社會主義へ、資本主義より共產主義になる筈であつたが、現在のボルシェビキのロシアはどうなつてゐるか。百八十萬の共產黨員で以て一億八千萬のロシアを牛耳つてゐるのであります。其中でも純粹の黨員は百二十萬。それで一切の對外國債を踏み破り、國內帝室や貴

道を説くことを力説して止まぬものであります。永生の自覺も向上の生活も要するに一切は天地一體の自覺から來たる同朋の發展に外ならぬのであります。

(三一、一、一六、再校尼ヶ崎にて)

族、寺院の所領財産を沒收し、資本家の事業財産を掃き上げ農民の私産までも一切を國有共産とし、國富産業生産を共有共働せよとしたが、事實は非常に反對で赤色直系の政府員、技師、監督、支配人、密債労働者等の獨裁專制となり、立派に新しい特權階級、支配階級が出来上つて了つた。そして一般國民に壓制、喝喝、不平等的對遇の下に不休の労働を強いられた。此の飢餓困窮不平は終に爆發して處々の暴動となり、都會にはストライキ、海軍にも擾亂となつて現はれて來た。それが爲めに勞農天下にも「廻れ右！」せねばならん展期が醸されて「新經濟政策」の樹立となつたので、これによつて最初に否定した。私有財産制貨幣流通、商品の賣買、租稅徵收などが復活され、原則として共産制は破壊され、新國

家資本主義への考案が、第一期五ヶ年計劃、第二期五ヶ年計劃として着々進められようとして居ります。外國市場へは盛にダンピングして國家的恢復、國家的發展を劃して來ました。勿論世界的に眺めて、舊資本主義に反して新國家政策を試みんとする面白い國家面白いモルモットで、世界的に反感を持たれ、疑問視せられてはゐるが、最も興味深い。最も將來性のある一人の「腕白小僧」であります。

獨逸も亦生れ更つた。

獨逸のカイゼルは、ロシアのザアとは違ふ意味で、亦特種な聯邦組織帝國を發達せしめました。其自尊の極か終に世界大戰となり、一敗強制的に外部から帝國主義が破壊せられ共和制になつたが。而し現在は國內にはヒツトリズム等が擡頭して共和制共産制より寧ろ國家主義への轉向を示してゐます。だから内に國家的産業強制管理があり、外へ向つては戰債賠償不拂聲名があり、國家的奮起を高潮してゐます。國內にはマルクス主義の勢力仲々強大なるものがあるに不拘、此等國民的社會主義が斷然壓倒的勢力を示して來たのは、ロシアに於ける新變化と共にマルクスの無政府共產主義への新しい解決を指示するものと思へます。

支那も世界の大國の一つとして清朝亡んで以來、一の

共和制國家となり其三民主義を世界に表明して居ります。國に人なく統一は出來て居らぬが、既に生れ更つた國の一つです。

此等の國ほど鮮かな根本的轉化振りではないが、イタリーのファツシヨ運動、インドのガンディー無抵抗々争、トルコのケマルパシヤの治政等、永らく眠つてゐた獅子が一度に眼を覺まして動き出したような感じがいたします。次に現在西班牙にも革命が起きてゐる。濠洲やカナダにも新獨立運動が起らぬとも限らぬ。

ギリシヤにもハンガリーにも愛國運動が起つて居ります。チエツコスローバキアのソコール運動も盛んです。あれを單に一種の體操團體だなど見縊つてゐてはいかぬ。溫和ではあるが内面的に徐々に革命を醸成して行く賢明な方法であります。

老帝國イギリスにも、斯く殖民地が漸次獨立運動を初めて來た形勢があり、經濟的に世界を支配せし絶對優位より轉落して、初めて自分の足元を再び固め直さねばならぬことに氣が附いて來て、最近極度の國榮主義を取つて來ました。而し最早や世界の氣勢として、異民族の住地を自分の殖民地として領有し、其土地よりの利益を壟斷して太るような國家的大資本主義は立たなくなつて、來ましたしてだん／＼ブルジョア國家は少くなるでせ

う。フランスも其一つです。

弗の國米國、新興の意氣尚ほ盛んに、物資に金に恵まれて、世界の金融權を掌握し、今後一層雄飛せんとするアメリカにも、従来の大量生産一天張りの、大資本主義の經濟組織が最上のものでないことが、最も痛切に味はれ、將來への生産方法、經濟統制への新方法を最も早く案出するものでないかと思はれます。けにフォードが云つた如く「世界は政治的に一國を救ひ、改善して行く可き時代でなく、經濟的に變へて行く可き時代になつて來て」居ります。アメリカであればこそ此の經濟的の大方向轉換が最も眞剣に起こされて來るのではないかと思はれます。

最後に日本はどうか。

日本にも今、一つの大きい「維新革命」が動き出そうとしてゐます。今迄内に在つて、却つて日本人がそれ程、心から知らなんだ「尊いもの」が、今將に、知られようとして來ました。それは二千五百有餘年繼承して來た不易國體の特有性と、日本精神とであります。一體自分の家に在る物はよく見えぬもので、他所の物は何でも無い物までよく見えるものです。だから自分の内に在るものを、正しく價值判斷することは、容易なことではなく、又出來ればそれ程尊い譯です。

國は悉く皆、今迄軍國主義、侵略主義であつたのです。見よ、歐州、中央亞細亞、印度、支那の諸民族を、彼等は戰ひ鬪つて、或は侵略し、或は侵略せられて盛衰興亡相反復し、今に至つて勢力を保つてゐるものが彼等である、そして今も尙、軍備の膨脹に惱み乍ら縮少を叫びつゝ一方では侵略の隙を狙つてゐる。日本が侵略的に一歩でも大陸や半島へ乗り出したことがあるか、常に侵かされんとして國家興亡の危期、舉國一致して立つた時のみである、それであるから強いのであり、又戰勝して來たのであります。それを外國人の口車に乗せられて自分自身、侵略主義だなんと思つて來たのは笑止の沙汰であります。常に最少の軍縮に肯せさせられ、それすらも保せぬ程に強壓されて來ました。此の防衛主義、自衛主義であること、今度の滿州問題によつて漸く國民自身が自ら悟つて來たような有様です。

滿州問題勃發當初は、まだ日本國民自身が侵略主義の爲めに兵を進めるような氣が幾分かしてゐたから、外國に對してすら氣がねするような處があり、腰弱であつたのが、氣が附いて見ればそうではなくて日本自身が世界的に侵略せられ、押し込まれそうになつてゐることを覺つてからは、斷々乎として自存の理由を開陳し、自衛の要求を天下に表明して、其所信を武の上に示して來たの

鬼に角建國以來二千五百九十三年、其間種々の政變はあつたにしろ、上に連綿の皇統を頂き國の組織に何等の變化が無かつたといふことは世界の奇蹟であります。ピラミッドが五千年來存在した以上の世界の驚異であります。これが世界の餘他の國の如く、劍で以て制服し、併呑した國なら、遠くの昔に劍を以て切り裂かれ、或は併呑せられて解消してゐたかも知れません。而し、和を以て包容し、相睦み。相協力して、共に働き、共に立ち、共に榮へて來た國だから、國に天資なく、小島國であり乍ら、獨立不羈其尊さを發揮して來たのであります。共和でもない、共産でもない、專制でもない、本當に我國民の民風と國體の素性とを眺めた時、何故翻譯的に共産になつたり、共和にする必要があるか。ロシアが轉覆したのには、そこにロマノフ王朝の過去の罪惡があり、獨乙の革命されたのにはプロシヤの專横があつたのです。又諸民族の複讎程度、地勢、交通、教育、經濟等の事情によつて夫れゝ國家形態が出来て來るものであつて、隣りが國振りを更へたから、自分の國も流行的に衣裳更へせねばならぬと云ふものではない。寧ろ其特質をますゝ發揮して行くことが自然の變化であり、發達であり、革命であります。

我國を軍國主義、侵略主義だと云ひます。それは諸外

で之れを押へるに由なく、今や諸外國も手を引き、支那も我主張に追従せねばならぬ、日の遠くないことを信ずるに至りました。今後の滿蒙新國家建設こそ日本精神の典型を世界に表現して見せるいゝ秋であります。日本主義は過去に臺灣朝鮮を如何に啓發し復活せしめた事が、少しも奴隸視し、屈從視したことなく、常に助成し、發達せしめました。そのように今度も一層日本の大精神を滿蒙の野に打ち立てねばならぬ。

今内に國家社會主義等勃興して、迎合的社會主義が、國本的自覺主義へ一步反省の兆を示して來ました。我々は今迄餘りに世界的風潮に迎合的であつた、浮腰であつた事を、總ての方面に感じて來ました。そして第三の維新は摸倣時代より創造時代へ乗り出しました。そして國民自覺運動も、ムツソリーニ式のフアツシヨ運動でもない、又ガンジー式でも、ヒットニー式でもない、米國の國旗尊重主義でもなく、支那の「國恥記念日」高潮式でもない、そんなものを眞似なくては國民の士氣が起されぬとか云ふのなれば駄目である。そうではなくて、日本の國風、國民精神をもう一度見直し、内省して、今迄餘りにも外國カブレして自己を忘れてゐた事に氣が付き、發展創造の意氣に燃え、和合淳化の純情に徹して、これを滿蒙の野に如實に示したい。これによつて日本が復古

し、これによつて新日本が派生して、天下に其美を誇ることが出来るのであります。

アフリカ成つて百數十年、漸く今あの盛大を致して居ります。滿蒙の野今後五十年、日本の大神神と、文明の利器、組織を應用して開發したら、素晴らしい樂土が出来上ること、決して空想ではありません。過去廿五年間に於てすら人口は四倍して二千萬、生産は數十倍して居ります。世界盛大の中心は、漸く老廢の地を去つて生新の地に見えんとして居ります。民族は自覺し、天富は開發せられ、新發の氣運が天下に充ち満ちて來ました。今こそ我等日本民族も、其力と其精神の美を愈々發揮して、其尊嚴を天下に示し人類幸福への歸趨を巨示すべきであります。

## 新年の歌

(之は年始に頂いた道友からの御歌です觀道)

○立ちかへる年ののとけさ曉は  
名古屋市 尾上銀子

鶏のやこゑもほからかにして

揖斐町 山本きぬゑ

○さしのほる旭のことくさわやかに

お慈悲の力に生きんとぞ思ふ

名古屋市 柵木よね

○あらたまの年の光にふみそめて

今年もふかき道やたとらむ

名古屋市 山田銀次郎

○みやしろの杜にはやみののこれとも

曉つけてにはとりのなく

神戸市 西藤かね

○神路山とりのなく音にこたまして

あめつちいまゆあけそむるらし

静岡縣 橋爪吾一郎

○元旦や何はなくとも親ふたり

神戸市 西藤杉松

○初鶏や曉天に立つ大鳥居

大阪市 土屋修

○新玉の年立かへる今朝の春

名古屋市 柵木よね

○ひとり來てひとり行くなりみな人も

たとへいと子ありといへとも

○御佛の慈悲にすかりておろかも

わたくしならてすぐる嬉しさ

# 傳道旅行お伴の記 片岡憲三

一、

土屋先生が三年前傳道を一時中止せられて著述の事に當られると云ふ聲明は各地道友の間に非常な反響を與へた。それはこれから當分の間先生の濶容に接する事が出來ないと云ふ失望と纏つた著書が得られると云ふ、希望との交錯であつた様に思ふが、時日の経過と共に前者の失望感が強く意識せられる様になり、各地の懇請黙止し難く一年後には年六七回も傳道の旅に立たれざるを得なくなつた。それでも主として書齋に過される時間が多く傳道は従とせられたのであつたが、遂に約束の三年は過ぎ愈々今春より傳道本位に立たれる事になつた。各地道友の渴望もこれで醫せられることであらう。

流石お膝下丈あつて東京眞生會は年と共に數を増し結束を固め昨年三月には皆して規約を繰り上げるに至つた。十月には事業運営の爲め總理の下に教學社會財務研究の四部門を設け各部長を置き各部門の連絡に主事を任ずる等陣容を整へて着々事業を進めて居る。考へるに我

等は單なる念佛の信者たるのみに終つてはならない。暗室に念佛の快味に陶醉するのみでは一種の自慰行爲たるに過ぎない。念佛の邪道である。これではマルクス一派より宗教阿片の蔑視も甘受せざるならない。我等は念佛を生活に行せずんば止まない。

二、

然も時代に移る。我等個々の生活に行ずるのみに甘んじては居れない。家庭に行じなければならぬ。社會に行じなければならぬ。否進んで世界宇宙に行ぜずんば止まない。世界の成佛あつて即ち私の成佛もあるのである。この自覺に立つ。所謂諦めは我等の取らざる所、社會組織の缺陷に氣附く者之が改革に動くも亦當然でなければならぬ。否社會改革は眞實の念佛行者に依つてのみ爲し遂げられねばならないのである。統制なき個々の十人は十の力以上は持ち得ない。之が團結して始めて百の力にもなる。況んや眞實念佛行者十人の結束は千萬の力を生み出す事易々たりと云ふ可きである。東京眞生會は



かくして生れた。然も各地道友結束して各眞生會を確立し眞生會は結ばれて眞生同盟を組織せらるるに至る可きを豫想して東京の規約は出来上つたのである。昨年唐澤のお別時に於ても眞生同盟要望の聲あり先生の起たる、日を期待して居つた。其間同志の間に於て四月行基寺での御別時を眞生同盟結成準備會に利用し七月唐澤のお別時を機として眞生同盟創立大會を擧げんと議が熟した。就ては其前に各地の眞生會を確立し地情に應じて規約を設け事業を運営し且眞生同盟の組織と運動に對する案を各地に於て練り纏めて準備會に持寄る必要あり四月迄には既に餘日もなければ、今の内に各地眞生會の確立と全國眞生同盟組織準備の爲め一月の傳道に一緒に廻らないかとお話を年末先生より承り無能其人に非ざる事を知りつゝもお受けして郷里吳に私は歸省した。

三、

愈、傳道本位で起たれる最初の旅に於て私は先生にお伴するの光榮を得ることとなつた。電報を頂いて郷里を立ち一月十六日夜大阪の豊田省三氏のお宅でお目にかつた。これより先、先生は十三日十四日に和歌山市と同縣黒江町との集に臨まれ十五日には尼崎市圓平寺に既に廻つてゐられたのであつた。和歌山方面は昨年集りが出

来たばかりであるが今後大いに發展を見る事であらう。殊に前京大講師中井先生のお力添へは同地道友の喜であると共に各地道友の期待をかけて居る所である。尼崎は大阪の會と一つとも云ふ可き程これ迄にもよく連繋が取れてゐた處である。大阪へは七年前一年間住つた事がある。同地道友の中心人物は皆知り合の仲ではあり、久し振りに會つた人もあり、殊に懐しく嬉しく感じた。先生に接する機會が少くなつて居つた關係上をしてこれは各地とも一般に同じ事であらうが、大阪眞生會に就いて云へば以前私が大阪に居た頃の勢よりは聊か衰えて居る感じがした。併し前から熱心に活動して居つた、人には矢張り續き熱心によつて居られるのを見て意を強うして次第である。大阪は知的壯年男子が中心であり先生の出勤と相俟つて今後力強く發展する事であらうと期待してゐる。結束發展策との爲め其後寄々協議が進められて行く模様である。翌十七日夕は同大阪市香尾龜次郎氏宅で集があつた。

四、

十八十九日は岐阜市で前日は本誓寺に、翌日は午後より公會堂に於て市會副議長赤堀三郎氏の肝煎で市の有志諸氏の集があつた。其日午前中は多忙中にも拘らず同志

五、

相集まられて會の結束發展についての協議が爲された。岐阜市には本誓寺様あり。舊友の熱心に加へて陸軍中佐古賀清一郎氏あり、前記赤堀氏も餘程先生に傾倒の趣眞生會は益々發展するの土地であらう。廿日廿一日は名古屋崇徳寺での集であつた。念佛講演座談と取交せて行はれ、廿二日の午後は眞生會の發展につき協議せられた。當地には崇徳寺様を中心に向上婦人會あり、仲々盛んである。男子の方は聊か引目あれども今後は渡部氏伊藤氏其他の同志に依つて面目を一新せらる事と期待して居る。行基寺様御兩方と古賀氏は岐阜名古屋に引續き行を共にせられ中野善英氏黒宮平氏は名古屋に來り會せられた。翌日私共は更に神戸に引返した。廿三日より三日間東極樂に於て先生を導師に御別時が營まれるからであつた。青年殊に神戸商大學生を中心にと云ふ話であつたが折柄試験前とて夫らしい姿は殆んど見受けられなかつた。集る人は多く婦人であつた。此處の婦人方の集は仲々盛な様に聞き及んでゐる。併しこの地唯眞生會の發展は將來に俟たなければなるまい。先生は引續き一枚紙請文につき講話せられた。廿六日神戸を立ち電車で三重縣大石村に行つた。大阪までは鶴田昌造氏が同行せられた。

大石村は谷口年泰氏宅の集であつた。谷口氏の熱心と母堂の信仰より出づる言葉には襟を正さしめられた。農村とて來り念する者純樸な青年多くこれまでの集りとは又別な趣があつた。將來益々結束を固めて一村發展の原動力となる事であらう。翌廿七日は隣村小學校に於て講演會が催された聴衆二百。廿八日は四日市眞生製陶所であつた。萬古燒の大きな窯元、名も眞生の名を冠して眞生主義に立つ一個の事業を私は始めて見た。中野末亡人を始め所の幹部諸氏は熱心なる同志である。念佛の内に營業がせられて居る。従つて經營振特に利益分配方法に於て他と異なる處があり不景氣時代に處して他に見られざる安易さがある。百名の従業員諸氏に眞生の自覺が深まれば深まる程益々將來に於て異色を發揮するに至る事を信じて疑はない。當地眞生會は今の處殆んど工場の内々に充實すると共に外に發展するに至らう。廿九日は桑名五井病院であつた。篤信な博士母堂を中心に漸次町に根を張る事だらうと思ふ。卅日、靜岡縣焼津町光心寺で集が催された。男女相半して居り眞生會の確立策も協議せられた。翌日靜岡市の道友とも連繋を計る爲多忙の

中から前田天野の兩氏は業々我等と行を共にせられ後又同地婦人三四の方も来り加はられて静岡市の華陽院に道友と協議せられた、何れ藤枝町の同志とも話合の上互に連絡しつゝ三地各眞生會を固めらるゝに至る事と期待して居る夜は同院に於て講演會あり其儘夜行歸途につき翌一日早朝恙なく着京其儘先生のお宅までお伴して辭去した。

六、

この行生先には廿日間殆んで不眠不休の活動を續けられ殊に病後未だ全快に非ざる身を以て東奔西奔全く全命を磨り減らしつゝあられるの思が痛切に感ぜられた。傳道本位に起たれるについて私は今後の健康に不安の念を抱かざるを得ない。各地道友はこの不惜身命の業を軽く受けては誠に相濟まん事であると思ふ。全心全靈を傾けて教を聴く可きは勿論地方傳道の際は出来る限り休養の時間を差上げる様に心掛け度いと思ふ。夫れに鈍感無態の私がお伴した事と何一つ先生の御世話も出来ず、道友諸兄弟にも嘸不快を與へ申しした事と恐縮した居ります。併し亦これまでになく長い間膝下に待するを得た事とて其間常に教を受け且私に取つては末踏の地が相當に多かつたので各地に見聞を廣め既知未知の道友より援か

き手に迎えられた事はこの上ない喜びでした。各地に蹂躪たる眞生の花咲く日の来らん事を期待すると共に此度道友諸兄弟の奮ならぬ好意を深く感謝致します。(二月三日片岡生記)

人は男でも女でも  
「もう私は年取つた——」なんては  
仲々思へないものだと思ひます  
それは次から次へと  
色々希望や計劃を逐つて  
ゐるからです。  
此の「光り」が無くなつたら  
人間は忽ち老ふ。  
常にニコツとして居りたい  
肚の中からニコツとして居りたい  
落ちる處に登る元氣も出る  
損する處に儲けたい元氣も出る  
萎縮してはダメです——  
萎縮するのは根のない木だからです  
今からでも晚くはナイ

(社)

支部通信

□京東支部通信

東京眞生會報 第貳號

昭和七年一月廿九日發行

盛大なりし

新年念佛三味會

一月四日より六日にわたる芝區増上寺内黒本尊における新年念佛三味會は新年の初頭にて皆様の御多忙のこともあり、來會者は僅かかと思はれましたが、遠く浦賀の會員の御参加もあり三日間にわたる延人員は百廿餘名の盛況でした。理事の方々の御丁寧な御世話と土屋上人の念佛の意義に就いての熱心なる御講話に刺戟され御念佛は自發的に御食事の間もおしまれて行なはれる様有様でした。

六日の晩は各自起立して感想を陳べました、他教の傳導師の念佛三味の感想及び御念佛中父母の恩が思はれてゲンゲした御方の御感想は、ひさしほ感銘の深いものでした。

皆様の御慈悲により東北地方凶作民救濟基金に投ぜられた、八圓六十二錢は佐藤益章様扱にて社會局を通じて送りました。

御念佛と眞心のふくまれた、このお金は凶作地方に如來の慈光を輝かすに至るでせう。

全國眞生同盟規約草案作成

當 任 理 事 會

十日夜佐藤益章様方に於て、昨年末總會の決議事項である、全國眞生同盟の規約草案を議題として審議し熱烈な討議によつて草案を可決致しました。

早速土屋上人の御手元まで草案を提出して加筆をお願ひして置きました。

これは全國委員の手により更に審議され同盟の規約となるでせう。徳壽院様の

常例念佛三味會

新年別時念佛三味會のあきをうけて十日午後より徳壽院様の集りは來會者十一名神谷善之進を導師として夕方まで充實せる氣持の宜い御念佛なつてくれました。

社 會 部

一、十二月廿六日 清水實相寺様御令息

御病氣にて東京病院に御入院

都築、神谷、兩氏御見舞に参りました

御見舞金 壹圓

二、十二月廿日 根來忠次郎氏祖母様御逝去都築神谷兩氏御悔に参りました。

御香料 壹圓。

三、一月十三日 清水實相寺様御令息

に御永眠、都築、神谷、土屋夫人御葬儀に参列 御香料 壹圓

常例道友座談會

一月廿三日京橋區西八丁堀大橋様方において開催、

お念佛ののち辨榮上人の御法語を同讀し意味を相互に研究致しました。

その他希望意見をもちより、眞生會の充實に、つぎめる機決定し散會。

× × × × ×

(以上は東京眞生會々報をそのまゝ轉載いたしました。)

□大阪支部通信

南無阿彌陀佛、片岡氏御同道御傳道之段支部員一同一段感銘を深め候本日委員會總會を開き東京眞生會規約に準じて大阪

支部規約を新たに定め、気分を一新して支部の充實を期する事に致候右規約は印刷出来次第御送附可申上候委員一同復興の気分にて色々々細目に亘り協議致候が右に就ては御面會の節御報告可申上候、次に誠に愁傷の極と申すべきか、大阪支部の爲めに大いに奮闘された水森島次郎氏が、一月十六日逝去され候御通知を氏の故郷から頂き今は只、氏の純なる人格を想ひ、冥福を祈るのみに候 合掌

南無阿彌陀佛  
本日和歌山法蓮寺様より、十四日は以前から通知しなくても集まつて貰へるよふになつて居るから變更しないで貰いたいの御通知がありましたので無理に變更して頂くわけにもゆきませんから十三日は春尾十六日豊田十七日圓平寺として頂きます不取敢御通知迄 合掌  
追而十四日午後一時より藤村様が樺山氏一週忌法要に樺山友人を集めて一席御話御願ひいたしたき由につき御諒承下さい。(大阪管我尾島治様報)

合掌  
皆様お變りありませんかおたづね申上

ます本月の日常管我尾様から御通知ある事と存じますが念の爲め私からも御願ひ申上ます。十三日午後六時から九時まで圓平寺、十四日午後四時から四時まで声屋藤村、十四日夕方は和歌山、十五日も和歌山、十六日午後六時から九時迄豊田、十七日は午後六時から春尾、さんとなつて居りますとぞそのおつもりでよろしく御願ひ申上ます。大阪の同盟も御上人様の御心の如くきつこ一生懸命動く様に力が、あへて来ました有りがたい事です。(尼ヶ崎圓平寺松井様報)

愛知縣津島支部通信  
當地發行の「一味」は新年號一萬二千部刷つて、年内に發送し盡し、正月になつてからも年賀にこれを見た新しい方から數百の注文が殺倒して来まして、而し手元に一枚も無く、辭はりました。驛でもハカキ挿しに入れて懸けて置き、自由販賣を初めましたが、一週間たつて見に行けばもう、賣り切れてあるといふ盛況で愉快でした。今迄も驛に錢を預けては注文して行く方が毎月あつたから、今年から自由販賣を初めて見ましたが、珍ら

しい、加減が意外に受けがよく、此分では驛だけで月に五六十部賣るのほさして困難でなさそうす。  
月の例會も私の家で十五日一日は、朝の九時から夜の十一時まで必ず念佛と座談を催して来ましたが、一日だけでは足らぬからもう一日夜だけの集りを、今月から初めました。従来も道友のお宅で夜だけの會は時々して来ましたが、これを確定事にいたしました。本當の道友が一人出来れば其人は、必ず三人四人を曳くもので、それをよう曳き得ないといふのはまだ其人が本當に出来上つて居らぬからであり、此意味からお互が眞劍に質の向上に努力したいと存じます、すれば數の成果は自然に擧つて来ます。

選舉運動ではないが、文書と言論、それに温い親切とで以て自己並に運動を進めて行くより仕方がないと思ひます。  
揭示傳道の文案、刷つたのがありますからまだ試みて居られない地方へは差上げたたいと存じます、御知らせを

吾朋便り

東京 土屋觀道  
全國の道友には其の後御變りも在らせませんが、私の一家は幸に皆無事、乍他事御休神下さい。次に私にも愈々約束の三年が過ぎましたので、承らくの室住いから出て傳道本位に他出する事になりました。

此の事については已に度々申述べた道りでありますが、たゞ私の信念は私の信する眞實の大道をありのままに多くの道友に語つて、共に眞實に生きたい一方でありませぬ。

それについて、各地の道友とも相談して、従前にも倍して、如來の大慈に共に生きたいのが私の念願です。就ては之から後若し私の健康が計り限り、今までの以外の方面へも此の道の宣傳に出張したいと思ひますから、御望みの方々ば前以つて御知らせを願ひます。

色々の費用や手つゞき等で御心配の方もありませぬがそれらのことも御心配なきやう御相談に應じたいと思つてゐま

今度道友片岡氏の御同伴を願つて、二各地の道友を御訪れいたしまして、今後の支部會の發展策をも御相談申しました。尙此の外の道友の方々も一々御訪れして共に御相談申したいのが山々ですが、時間の都合でその意を得ませんでした事を御許下さい。何れ詳しいことは御目にかゝつて、段々に御相談申上たいと存じてゐます。

それにしても、従前に比して更に一層の努力と躍進の氣分に各地の道友が進んで見えたことは私に於ては限りなき喜びであります。

東京 岩見次三様  
世の中が進むにつれて人間の生活は次第に平安ならねばならぬに現實は反つて陰鬱と不安になつて行くのは如何なるわけでせうか、是は職し人間が理智にのみ走り過ぎて情の半面を没却するからであります。

私は昨秋から「全世界の驚き」三百頁以上「價値」の著作に没頭して居ました、愈々本月中に出来上る事となりまし

た。本書は西歐文化の源泉たる基督教の欺瞞を根本的に曝露したもので、私の目的とする所は本書によつて基督の正體を世界中に知らしめ、此の地上から差別と争闘の禍根を絶つ事にあるので今後は世界平和運動に一身を捧げつくす決心でありますから、御後援の御厚情を垂れさせられ一本の御購讀を御願ひ申上ます。先は御年賀を兼ね御挨拶まで

滋賀縣 福永勇賢様  
まづ昨年の御謝比を感謝いたします。私はもうしばらくで子供の父親としての責める荷負してゆかねばなりません。夫婦愛の齟齬はこの必然に直面して絶大の希望に燃えてゐます。この耀しい生活の首途を永遠に持續せしめたい思念に終始すべく勇躍してゐます。

どうぞ、凡てに賛し私を御提携下さいませぬやうに切望いたして止みませぬ。  
東京 吉田庄七様  
昨年一月八日伊勢の内宮大前に於て、大國難の襲來と其時に處すべき國民的覺悟を啓示されました私は、更に、八月二日鹿島神宮に於て布都靈劍は今又降る

この神の剣を振ふ時に國民は覺醒める、萬事は其上であるとの靈感に打たれ、宛ら非常招集のラッパの音を聞く心地して職を辭して入京した九月十九日朝、滿州事件の號外に接したのも實に不思議に感ぜられ、其後類發の事件々々として眞の神示を證明しつゝあるのに驚かされてゐます。

今や世界の經濟外交思想等の情勢は、暗雲低迷まさに世界的大動亂の危機を孕み、國內改選の機亦切迫して革命前夜の形勢を示すの時、どうかして我が祖國、

民族の進路を正しくしたい唯一の念願から一、神武建國大化改新及び明治維新ノ大理想ヲ完成シヨウ 二、安心シテ生活テキル社會ヲ造ラウ 三、進ンデ大義ヲ世界ニ布カウ、此のローガンを建國祭を通じて全國民に呼びかけると共に、進んで昭和維新聯盟をつくつて此の國難の打開と民族正氣の發揚とに貢獻いたしたい微衷でございます。

どうか愚衷を掬まれて此の志業達成の爲めに御援助下され度く懇願申し上げます。

敬具

誌代拂込並寄贈者御芳名

- 六拾錢 福岡 波多江傳隨様 ○壹圓宛 柏崎 中村利平様 高橋久治様 大島 正春様 山田健治様 小池雪子様 後藤甚次郎様 猪爪かじ様 新澤眞吉様 森山 吉次様 柴野甚次郎様 △東京 山田ハナ様 宮下くら様 △臺北 新館謙次郎様 △山口 河本つね様 △愛知 水谷琴策様 △佐賀 竹永瑞雄様 △三重 山下清太郎様 △名古屋 磯田まさ様 ○貳圓宛 柏崎 小林嘉一郎様 金澤清作様 市川さし様 後藤寅三郎様 岩下祥兒様 △博多 井上清次郎様 △佐世保 富田等平様 △神奈川 相馬千里様 △岐阜 行基寺様 △四日市 五井隆様 △名古屋 鬼頭藤十郎様 △尼ヶ崎 山島文吉様 △名古屋 崇徳寺様 ○參圓宛 熊本 宮本つる様 △愛知 高羽直様 △大阪 酒井又治様 ○五圓宛 桑名五井さま様 佐原眞様 △柏崎 桑野喜太郎様 △神戸 藤村よね様 △名古屋 西脇賢吾様 ○八圓 浦賀 上坂伊之助様(扱)

大正十一年八月十三日 昭和七年二月十日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第十二卷第二號

本誌定價  
一部 金 十錢 郵税共  
半年 金 六十錢 同  
一ケ年 金 一圓 同

注文の注意  
講讀希望者は代金を添へて御申込下さい。  
誌代は總て前金御拂込の事  
送金は振替によるのが便利です。

昭和七年二月十日印刷納本  
昭和七年二月十二日發行  
東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

東京市外濠谷町中通二ノ四二  
印刷人 副島 慎夫

東京市外濠谷町中通二ノ四二  
印刷所 丹丘舎印刷所  
電話青山七九二番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社  
振替口座東京四七二八八番